

ベルルスコーニのリーダーシップ —第二次ベルルスコーニ政権組閣過程の分析—

池田 和希

Leadership of Berlusconi —Analysis on the formation of the Second Berlusconi Government—

Kazuki Ikeda

Abstract

This paper, based on the leader-follower relationship, focuses on the leadership of Silvio Berlusconi and clarifies its features. It also attempts to capture Berlusconi relatively. How was the formation of the Second Berlusconi Government (the Second Government), which lasted five years after 2001, accomplished? Moreover, what kind of leadership did Berlusconi exercise in that process? The analysis in this article reveals two characteristics of Berlusconi's leadership. The first is the transactional aspect and the second is the clientelistic component in the relationship between Berlusconi and his aides.

Below, this paper outlines how political leadership has been treated in political science and examines existing research on Berlusconi's leadership. Then, it contemplates the significance of considering Berlusconi's leadership from the perspective of the leader-follower relationship (Section 1). Next, the experience of the First Berlusconi Government, which collapsed in less than a year after 1994, is discussed (Section 2). Then, the relationship between coalition parties in the Second Government is proved from the viewpoints of distribution of portfolios and general policy speech (Section 3). Finally, this paper clearly shows the relationship between the coalition parties and the features of Berlusconi's leadership and identifies the issue of the Second Government.

This article implies that when analysing personalisation and presidentialisation, it is possible to clarify these structures by observing not only an actor of interest but also those around that actor.



目次

1. ベルルスコーニのリーダーシップ—大統領的首相？
 - 1.1. 政治的リーダーシップ論と現代政治
 - 1.2. ベルルスコーニのリーダーシップ論
2. 第二次政権に至る経緯—第一次政権の経験

3. 第二次政権の誕生—組閣過程とリーダーシップ
 - 3.1. 2001年総選挙と第二次政権—選挙結果と組閣過程—
 - 3.2. 分析
4. 結びに

1. ベルルスコーニのリーダーシップ—大統領的首相？

本稿は、リーダー・フォロワー論を下地に、ベルルスコーニ (Silvio Berlusconi) がそのフォロワーとの関係性の中で発揮するリーダーシップに注目し、その特徴を明らかにする。2001年から5年間存続した第二次ベルルスコーニ政権 (以下、第二次政権) の組閣過程を対象に、ベルルスコーニのリーダーシップをフォロワーとの関係性の中で相対化して捉えることを試みる。第二次政権の組閣はどのように行われていったのであろうか。そして、その過程でベルルスコーニはどのようなリーダーシップを発揮したのか。

以下では政治学において、リーダーシップがどのように扱われてきたのかを概観し、ベルルスコーニのリーダーシップに関する既存研究について検討する。そして、ベルルスコーニのリーダーシップをリーダー・フォロワー論から考察する意義について考える (第1節)。その後、1994年から1年経たずに崩壊した第一次ベルルスコーニ政権 (以下、第一次政権) の経験について論じ (第2節)、閣僚ポストの配分及び第二次政権の所信表明演説から、第二次政権初期の連立与党間関係を明らかにする (第3節)。最後に、連立与党間関係とベルルスコーニのリーダーシップの特徴を明らかにし、第二次政権の分析のポイントを示す。

1.1. 政治的リーダーシップ論と現代政治

現代政治における政治的リーダーシップ (political leadership、以下リーダーシップ) を理解する上では、バーンズ (James MacGregor Burns) によるリーダー・

フォロワー論が先駆的な研究として重要である。そのリーダーシップ論は、リーダーシップを、リーダーとそれに追従するフォロワーとの関係性の中で捉えようとする点に特徴がある。バーンズによれば、リーダーシップは、ある動機や目的を持った人物が、他者と競合あるいは対立する中で、フォロワーの動機を高めたり、ひきつけたり、もしくは満たすために制度的、政治的、心理的、そしてその他の資源を動員する際に行使される¹。リーダー・フォロワー関係からは、2つのリーダーシップを捉えることができる。それは、取引的リーダーシップ (transactional leadership) と変革的リーダーシップ (transforming leadership) である。前者は、リーダーによる他者との価値の交換から派生するリーダーシップであり、基本的には静態的かつ日常的な範囲で展開される。一方後者は、リーダーとフォロワーがより高次の道徳的・動機的次元を求めて、「融合」を果たす過程であるとされる²。

リーダーシップ研究は、政治学において長らく不遇をかこってきた³。その理由は、第一に、リーダーシップの環境的要因をコントロールすることの困難さとリーダーシップに関する社会学的アプローチや心理学におけるパーソナリティ論の根拠の不確かさである⁴。第二に、社会学的アプローチとリーダーシップの関連の薄弱さおよびパーソナリティ概念の薄弱さである⁵。そのような問題を抱えるリーダーシップ論は、それを執政のレベルに限定して適用する形で新たな発展を見せてきた。それが、コア・エグゼクティブ (core executive、中核的執政部) 論である。伊藤によれば、多くのリーダーシップの定義から、リーダーシップとは、リーダーとフォロワーの関係であり、リーダーシップ論は、何よりもアクター、あるいはアクター間

の相互作用に焦点を合わせるアプローチである。伊藤は、その流れの中にコア・エグゼクティヴ論を位置付け、コア・エグゼクティヴ論は、執政（executive）リーダーシップと考えることができ、コア・エグゼクティヴ論は、執政リーダーシップ概念を中央政府に適用した一つのヴァージョンであるとしている⁶。いわば、バーンズを始点とするリーダー・フォロワー論はアクターの相互作用に注目するアプローチであるために、政治の中でも特に執政における決定過程を明らかにするのに用いやすいアプローチなのであり、それがバーンズのリーダーシップ論のメリットとも言えよう。

そこでしばしば議論となるのが、大統領制における執政長官、すなわち大統領と、議院内閣制における執政長官、すなわち首相のリーダーシップの違いである。両者のリーダーシップについて、大統領の方が首相よりも強いリーダーシップを発揮しうる、といったイメージも持たれているが、実際には両者のリーダーシップは流動的である。

そのような分脈でポグントケ（Thomas Pogutke）とウェブ（Paul Webb）が行なっているのが、「大統領制化（presidentialization）」に関する議論である。ポグントケらは、大統領制化を「ほとんどの場合に形式的構造である体制タイプを変えることなく、体制の実際の運用がより大統領制的なものになってゆく過程⁷」と定義する。その背景には、民主的な政治システムにおける政治的リーダーへの権力集中という現象があった。大統領制化は、執政府・政党・選挙の3つの側面で生じ、その要因は、構造的要因（政治の国際化、国家の肥大化、マスコミュニケーション構造の変化、伝統的な社会的亀裂による政治の衰退）と偶発的要因（リーダーの人格と政治的状況）に区分される⁸。

ポグントケら的大統領制化に対しては、以後様々な研究でその妥当性が検証されている。例えば、待鳥は、大統領制化が魅力的なものであり、大統領的首相論の体系化の試みとして貴重であると評価しつつも、以下の点において、ポグントケらの理論的な不十分さを指摘する。第一に、政治の大統領制化が生じる因果関係の議論が不十分である。第二に、大統領制化を制度構

造やイデオロギーの変化とは無関係の現象として捉えてしまっている。第三に、ポグントケらは大統領制化について語りながら、大統領制の本質について本格的な検討を行っていない⁹。

その上で、大統領制化をより精緻化するためには、大統領制および議院内閣制に対して制度構造の分析からアプローチを行う、比較執政制度論の知見を参照する必要があるとし、大統領制化の再定義を行なっている。古典的な議院内閣制が古典的な大統領制に接近しているというだけでは、分析概念として不十分である。議院内閣制が大統領制に接近しているかどうかを検討するためには、制度論の視点が必要であると主張する¹⁰。

しかしながら、待鳥のポグントケらに対する批判とポグントケらの主張にはズレがある。阪野によると、リンズ（Juan Linz）の議論を契機とする大統領研究が、大統領制と議院内閣制の相違が、どのようにして民主主義体制の安定・崩壊に繋がるかを明らかにすることを問題関心の起点に置いていた一方、ポグントケらの問題関心は、現代デモクラシーの今日的な変化とそれをもたらした要因を明らかにすることにある。そこで問題とされているのは政治スタイルの変化であった¹¹。このように、大統領制化という概念は未だ論争の途上にある概念であるとも言えよう。

1.2. ベルルスコーニのリーダーシップ論

ベルルスコーニのリーダーシップについては、以下の3つの研究の潮流が見出される。第一に、ベルルスコーニの「メディア化された（mediatised）」リーダーシップ、第二に、ベルルスコーニのリーダーシップの人格化（personalisation）、第三に大統領制化との関係性である。ベルルスコーニのリーダーシップにおけるメディアの存在とリーダーシップの人格化は密接な関係にある。カンパス（Donatella Campus）は、ベルルスコーニ及びサルコジ（Nicolas Sarkozy）のリーダーシップを「メディア化された（mediatised）」リーダーシップの出現として分析している¹²。そのようなリー

ダーシップの形態が出現する背景には、政治自体のメディア化 (mediatization) と人格化があった。カンパスの研究がそうであるように、ベルルスコーニのリーダーシップ論においてもまた、リーダーシップ全般の研究潮流と同様に、「人格化」や「大統領的首相」などがキーワードとされてきた。また、吉田は、ポピュリズムの分脈で、ベルルスコーニとサルコジを 1980 年代までのネオ・リベラル型ポピュリズムと区別し、「現代ポピュリズム」として位置付ける。そこで挙げられたのは、統治の手法における個人的なリーダーシップであった¹³。

カリーゼ (Mauro Calise) はまた、パーソナル・パーティー論において、ベルルスコーニをテーマとして、イタリアにおける政党政治の衰退と、「カリスマなき指導者」の台頭を論じている¹⁴。ベルルスコーニの出現以降、イタリアの選挙戦では、各党がベルルスコーニのスタイルを真似ることにより、多種多様な「パーソナル・パーティー」が出現することになる。そして、それは 1990 年代以降のイタリアの政党政治の流動化を捉える上で重要な概念となる。

また、大統領制化という文脈では、先のポグントケらは大統領制化の典型としてベルルスコーニを挙げており¹⁵、彼らの議論を見ると、確かに大統領制化はベルルスコーニによる政治に合致しそうに思われる。ポグントケらの見解同様に、カリーゼは、ベルルスコーニによる政党「フォルツァ・イタリア (Forza Italia, 以下フォルツァ)」は、政党の側面における大統領制化の極端な事例であり¹⁶、また選挙の側面では、ベルルスコーニの政界参入が甚大な影響をもたらした¹⁷とし、イタリアを大統領制化の典型的事例とする。

このようなベルルスコーニのリーダーシップに対する見方は、第一共和制における強力なリーダーシップの欠如に起因している。戦後のイタリア共和国憲法では、行政府において、そもそも個人のリーダーシップが発揮されるような資源配分がなされておらず¹⁸、共和国憲法制定の 1948 年から第一共和制崩壊の 1992 年まで、首相による強力なリーダーシップが発揮されることはなかったのであった¹⁹。

しかし、ベルルスコーニを中心に据えて彼のリーダーシップを分析するアプローチは、例えば彼の政党であるフォルツァ研究の中で、ベルルスコーニを分析の軸に据えたために、フォルツァの政党としての特徴を十分に捉えられなかった²⁰ように、ベルルスコーニという存在がバイアスとなり、現象の捉え方を誤ってしまう側面が否めない。例えば、大統領制化の議論に見られるようなベルルスコーニのリーダーシップの強さを指摘する見方は、村上によるベルルスコーニの統治への評価と真っ向から対立する。村上はベルルスコーニのリーダーシップについて、「ベルルスコーニは、国民からの直接的な負託を得た大統領的な首相であると豪語していたにもかかわらず、すでに組閣の段階において、強力なリーダーシップを発揮するどころか、自らの意思によって閣僚ポストを決めることができ」ず、「ベルルスコーニは、大統領型の強力なリーダーシップを発揮したとはいいいがたい、連立与党間の駆け引きにもとづく妥協を余儀なくされた²¹」と論じる。

このように、村上は、ベルルスコーニのリーダーシップの強さについて否定的な見方をしている。村上が、ベルルスコーニの大統領的首相論を否定したことは極めて適切な見方である。しかしながら同時に、その分析もベルルスコーニへの視点の集中から抜け出せていない側面がある。すなわち、政権内でのベルルスコーニのリーダーシップを否定的に捉えながらも、実証研究の観点から望まれるであろうその決定構造の分析に至っていないのである。

1990 年代以降のイタリアの政党政治が、中道右派と中道左派の二陣営により展開され、首相候補者を掲げる中で展開されたとはいえ、政権の実態は複数の政党からなる連立政権である。そこに、「第二共和制」の民主主義の病理がある。すなわち、選挙では首相候補者を巡って争う事実上の政権選択選挙を展開しながら、選挙が終わり政権構築以降となると、連立各党の利害が表出し、選挙での勝利を誘引としていた連合の結束が揺らいでしまうのである。また、確かに選挙レベルや政党論のレベルでのベルルスコーニの影響は無

視できないものであるが、執政レベルでの議論となると、政権の人格化の度合いは、連立政権であるがために下がっていた²²。そのような状況下では、ベルルスコーニが単独で決定を行えないことは当然の帰結と言えよう。このようなベルルスコーニ中心主義的なバイアスを乗り越えるためには、ベルルスコーニの外的要因に着目するアプローチが有効である。

そこで本稿では、ベルルスコーニを取り巻く外的要因のうち、フォロワーに注目する。その着眼のメリットを説明するためには、第二次政権の推移を先取りする必要がある。第二次政権の前半では、司法改革や労働市場改革などを次々と実行していった一方、政権後半では、政権内の対立やスキャンダルで改革の弾みが失われていく。それは、イタリアの国際競争力回復に不可欠な規制緩和など、重要改革が先送りにされたとの批判にも繋がった。加えて、政権前半の改革も、狭い党派的利害に沿うものであった点で問題を抱えていた²³。

第二次政権の大まかな流れを踏まえると、次の2点でリーダー・フォロワー論は有効である。第一に、リーダー・フォロワー論により、政権内の利害関係の変化を捉えることで、第二次政権の求心力が失われていったプロセスとその背景にある構造を理解することが可能となる。第二に、第二次政権の改革が狭い党派的利害に沿うものであったことを考慮すると、リーダー・フォロワーの利益の交換という側面から、いかなる決定により、そのような帰結がもたらされたのかを明らかにできる。

本稿の分析対象は、第二次政権の組閣過程とし、その中のベルルスコーニのリーダーシップの特徴に焦点を絞る。第二次政権を扱う理由は、第二次政権が、5年間の任期を全うし、ベルルスコーニのリーダーシップの特徴・変遷を継続的に測定することが可能だからである。1994年の第一次政権では、1年持たないうちに退陣しており、2008年の第四次政権も2年程度しか存続していない。さらに、第四次政権にはユーロ危機という特異な外的状況が存在し、ベルルスコーニのリーダーシップを測るのがより困難である。また、本

稿が第二次政権の組閣過程に焦点を当てるのは、組閣過程が各党の公職を追求する過程であり、各党の利害対立が見えやすく、その中でフォロワーとの関係性からベルルスコーニのリーダーシップを捉えることが可能だからである。

ここで、本稿のリーダー・フォロワー間構造の全体像を示しておく必要がある。リーダー・フォロワー間の構造を掴むにあたり、吟味すべきは、何をリーダーとし、何をフォロワーとするか、という点である。リーダーをどのアクターに設定するかという問題に対しては、リーダーを個人(ベルルスコーニ)とするのか、集団(ベルルスコーニと彼を取り巻く側近つまり、コア・エグゼクティヴ)とするのかという論点がある。そして、リーダーの捉え方によって、フォロワーの射程も定まることになる。すなわち、リーダーを個人と捉える場合、フォロワーはベルルスコーニ以外の政権を構成するアクター、党所属議員、党員、有権者となり、リーダーを集団と捉える場合、フォロワーはコア・エグゼクティヴ以外の連立与党内の他のアクターとなる。

本稿では、リーダー・フォロワー間構造の2つの捉え方のうち、前者、すなわちリーダーをベルルスコーニ個人として捉える視点を採る。それは、少なくとも、本稿が分析の対象とする組閣過程では、リーダーを集団と捉える余地は少なく、リーダーを個人として捉えた方が、リーダー・フォロワー間関係を整合的に捉えることができるからである²⁴。

そのような視点に立つと、ベルルスコーニ個人のフォロワーは2つの観点から捉えることができる。第一に、ベルルスコーニの側近であり、第二に、連立与党である。ベルルスコーニの側近については、①フォルツァの立ち上げに尽力し、第一次政権で中核を担ったメンバーたち²⁵(ベルルスコーニの企業体を中心とする人々)と②1996年総選挙の下野後、フォルツァの党改革に加わったメンバーたち²⁶(1996年総選挙で新たに当選した人々)として捉えられよう。加えて、本稿はフォロワーの中に潜在的な連立与党を含めて考える。その理由は、「第二共和制」の選挙制度にある。

その特徴は、第一共和制期の比例代表制から多数決型の選挙制度に変わったことと、選挙において2つの陣営が、各陣営の首相候補者を掲げて争った点である。そこで重要であったのは、首相候補者（リーダー）を中心とする陣営の結束度であった。すなわち、選挙で勝利するためには、首相候補者を筆頭に陣営が1つにまとまっている必要があったのである²⁷。そのような制度の中では、リーダーには自党のみならず陣営を構成する将来の連立与党をもまとめ、また将来の連立与党はリーダーを中心にまとまる誘因があった。従って、第二共和制における政党政治では、フォロワーに連立与党も含めて論じるべきであろう。

2. 第二次政権に至る経緯—第一次政権の経験

ベルルスコーニがイタリア政界に参入したのは、第二共和制の幕開けとなる1994年総選挙であった。第二次政権の組閣過程では、連立を組む各党、特にフォルツァ、国民同盟（*Alleanza Nazionale*）、北部同盟（*Lega Nord*、以下レーガ）の3党が第一次政権の失敗を考慮しており、本稿の分析のためには、第一次政権の成り行き、中でも特に崩壊に至った経緯を押さえておく必要がある。

イタリアの戦後の政党政治は、左翼・中道・右翼の3ブロックに分かれ、戦後一貫して政権を担い、優位政党であるキリスト教民主党（*Democrazia Cristiana*, DC）を中心に展開されていた。左翼には、戦後西欧最大の共産党（*Partito Comunista Italiano*）が存在し、右翼には、ネオ・ファシスト政党であるイタリア社会運動²⁸（*Movimento Sociale Italiano*, MSI）を抱え、共産党とMSIは事実上政権から除外された政党であった。このように、DCを中心に政党政治が展開された「第一共和制（*Prima Repubblica*）」は、左右のイデオロギー的相違の大きい政党が、数多く存在することを特徴としていた²⁹。

第一共和制下では、1980年代以降、既成政党に対する抗議が高まり始め、1992年にミラノに端を発する大規模な汚職摘発「清い手作戦（*Mani Pulite*）」に

より多くの政治家が捜査対象となった。その結果、政界は麻痺状態に陥る。その後の選挙制度改革を経て、「第一共和制」は崩壊、既成政党のほとんどが消滅し、新たな政党システムが形成されるに至った。その後の時代は「第二共和制（*Seconda Repubblica*）」と呼ばれ、まさにその幕開けとなったのがベルルスコーニの登場であった。

1994年に新選挙法である小選挙区比例代表並立制の下行なわれた総選挙は、ベルルスコーニを中心に不規則な形で選挙連合を形成した中道右派陣営³⁰、旧DCを中心に組まれた中道陣営、共産党の後継である左翼民主党³¹（*Partito Democratico di Sinistra*, PDS）を中心とする中道左派陣営の三陣営により展開された。その結果、ベルルスコーニ率いる中道右派陣営が勝利し、第一次政権が成立する³²。

ベルルスコーニのリーダーシップを考察する上での1994年総選挙の重要な点は以下である。まず、選挙運動のパターンが変化した。選挙戦においてマスメディアを駆使した選挙運動が展開され、さらには首相候補者を打ち出して選挙戦を戦う、「選挙戦の人格化」が生じたのである³³。加えて、フォルツァが政界に参入したことで、DC崩壊により失われていた保守層の受け皿が提供された。そして、フォルツァを中心に「ブリッジ連合」が組まれたことで、支持基盤が相対立するレーガと国民同盟の連合を可能にした。この枠組みは1996年総選挙で一度崩れるものの、2001年総選挙では維持されることとなる。

では、第一次政権はどのような難題を抱えていたのだろうか。それは、上院での過半数割れ、レーガとの対立、ベルルスコーニの利益相反問題の3つである。第一の難題に関しては、中道右派陣営は下院では過半数を制していたものの、上院では過半数に3議席届かない状態であった。それゆえ、上院の信任投票をめぐって、中道連合の上院議員4人との交渉の末、投票時に議場から退席するよう説き伏せるという手法を取らざるを得なかった。

第二の難題について、1994年総選挙では、フォルツァがレーガの地盤を侵食していたことが明らかで、

そのため、総選挙後にレーガ党首ボッシ（Umberto Bossi）がベルルスコーニの首相就任に激しく反対し、ベルルスコーニへの批判のみならずブリッジ連合の「南部」サイドである国民同盟党首フィーニ（Gianfranco Fini）を侮辱するような発言も展開することとなる。このようなレーガとフォルツァの対立構図は後に見るように、第二次政権の組閣過程でも見られた構図である。

第三に、第一次政権下でベルルスコーニは利益相反問題を抱えていた。複数の企業を傘下に抱える起業家ベルルスコーニが、その立場を維持したまま首相になることが問題視されたのである。その問題は実際に、政権にも持ち込まれた。ベルルスコーニは、彼の腹心であり、ベルルスコーニのフィニンヴェスト社の顧問弁護士プレーヴィティを法務相に就任させようとしたのである。しかしながら、そこに当時のスカルファロ大統領が立ちふさがり、結局プレーヴィティは国防相に就任することとなった³⁴。

以上のような難題を抱えた第一次政権は1年も経たないうちに崩壊することとなる。その原因は、連立相手のレーガにあった。1994年12月、レーガはミラノ検察庁によるベルルスコーニのフィニンヴェスト社への脱税・贈賄容疑での捜査令状発令に揺れる第一次政権からの離脱を画策し始める。その動きに対し、ベルルスコーニも多数派を維持しようとレーガや人民党議員の懐柔を試みたが、その甲斐虚しく、ボッシは「寝返り」を決断する³⁵。12月17日のレーガ、人民党、PDS、共産主義再建党（Rifondazione Comunista, RC）による内閣不信任案により、第一次政権継続の望みは潰えたのであった³⁶。その後は、第一次政権で国庫相を務めたディーニ（Lamberto Dini）が実務家内閣を率いたが、その1年後に行われた1996年総選挙で中道右派陣営はレーガを欠いた状態で選挙戦に望み、中道左派陣営が勝利、第一次プローディ政権が誕生するに至る。

ベルルスコーニはその再登板に際して、第一次政権時の難題や、1996年総選挙での下野など過去の経験をどのように糧としたのであろうか。それは次の3点

に求められる。第一に、ベルルスコーニは1996年総選挙での敗北後、党組織の強化に取り組んでいる³⁷。第二に、利益相反（conflitto d'interessi）への対応である。ベルルスコーニは、第二次政権を向かえるにあたり、選挙戦で政権構築後、100日で利益相反の問題を検討する委員会を設けることを表明していた³⁸。最後に、連合形成の陣容の変化である。レーガに「裏切られた」のち、ベルルスコーニは連合形成においてをキリスト教民主主義系の政党に接近するようになる。1990年代以降のキリスト教民主主義系の政党は小規模な勢力に留まっていた上に、右派と左派に分裂していたが、選挙で勝つためには依然重要な勢力であった³⁹。その結果、第二次政権ではキリスト教民主主義政党も陣営に加えることとなった。

3. 第二次政権の誕生—組閣過程とリーダーシップ

以下では、議席数を指標に中道右派各党の政党間関係を見た後に、第二次政権の組閣過程におけるリーダーとフォロワーの関係性を読み解く。その論点は次の通りである。第一に、第二次政権と連立与党の利益が何だったのか。具体的には、人事（閣僚の配分）とそれに伴う政策領域の住み分け・競合に着目する。第二に、それらの利益に対立が生じた際に、連立与党間でどのように利益の交換が行われたのか。第三に、組閣の調整を通じて見られるベルルスコーニのリーダーシップの特徴と連立与党との関係性はいかなるものであるのか。これらのポイントを明らかにするために、新聞（*Il Corriere della sera* 紙）による報道とベルルスコーニによる所信表明演説を用いる。新聞の報道は、あくまでリーダー・フォロワー関係に起きた事象を捉えるために用いられ、新聞の政治的な主義主張が分析に介在しないよう留意する⁴⁰。

3.1. 2001年総選挙と第二次政権—選挙結果と組閣過程—

2001 年総選挙は、中道左派・中道右派の二陣営の対決構図が一段と明確化する中で行われる。中道右派陣営「自由の家 (Casa delle Libertà)」は、ベルルスコーニを首相候補に立て、フォルツァを中心に、レーガと国民同盟という 1994 年総選挙と同じ陣営に、「白い花 (Bianco Fiore)」を加えた中で形成された。「白い花」は共にキリスト教民主主義系のキリスト教民主センター (Centro Cristiano Democratico, CCD) と統一キリスト教民主派 (Cristiani Democratici Uniti, CDU) の政党連合である⁴¹。一方、中道左派陣営は、「マルゲリータ (Margherita)」出身のルテッリ (Francesco Rutelli) を首相候補に据え、多数の政党から成る「オリーブ」連合を形成した。RC など一部の左派政党は独自に選挙戦に臨むこととなった⁴²。そして、中道右派陣営の議席数は次のような結果となった。下院では、630 議席中 367 議席⁴³、上院で 324 議席中 177 議席⁴⁴を獲得し、上下両院共に中道右派陣営が過半数を占めることに成功したのである。

では、2001 年総選挙は第二次政権にとってどのような状況を生み出したのであろうか。まず、上下両院で過半数を制したことは重要である。それにより、第一次政権よりも安定的な政権運営を展開することが可能となった。下院では、過半数ラインを 51 議席、上院では、14 議席上回っている結果である。第一次政権が抱えていた「数」の問題は克服された。次に、中道右派陣営内の各党の関係を中道右派の総議席に占める各党の議席数の割合からみると (表 1)、上下両

院を通して第 1 党がフォルツァで、国民同盟、CCD-CDU、レーガが続くという形になっている。フォルツァと国民同盟が他の 2 党に比べ議席数で抜け出た形になり、この構図は第一次政権期と変わらない。

一方、第一次政権期から大きな変化が生じたのがレーガである。第一次政権では、そもそも連立が、フォルツァ、国民同盟、レーガの 3 党によるものであったが、第二次政権では、連立に CCD-CDU が入ったことで、レーガは第 4 党の立場に追い込まれてしまった。さらにレーガは第一次政権期と比べ議席も減らしている。また、政権に CCD-CDU を含めたことで、議席としては余裕を持つことができた一方で組閣の観点からは、パイを分けるアクターが増えたことで、各党の取り分が少なくなるというジレンマが生じることとなった。

第二次政権の目標とベルルスコーニの利益

5 月 13 日の総選挙で勝利したベルルスコーニは、早速組閣に着手する⁴⁶。第二次政権の目標とは何であったのだろうか。政権の掲げる目標は組閣にも反映される。政権の目標は 3 点である。一つは、5 年間存続し、つまり任期を全うすることができ、さらに変化を達成することができる政権を構築することである⁴⁷。次に、連立与党間に不満を作り出さないことである。第二次政権の組閣にあたって、ベルルスコーニは「ポストは全員に与え、誰も不満足にはさせない」ということを組閣の初期の段階で述べている⁴⁸。最後の原則

表 1 上下両院における中道右派陣営各党の議席数と割合 (2001 年総選挙時)⁴⁵

	下院	中道右派合計議席に 占める割合	上院	中道右派合計議席に 占める割合
フォルツァ	189	51.50	82	46.33
国民同盟	96	26.16	46	25.99
CCD-CDU	40	10.90	29	16.38
レーガ	30	8.17	17	9.60
その他	12	3.27	3	1.69
計	367		177	

は外交分野におけるものである。それは、イタリアとイタリア人の利益のために最善を尽くし、海外でより高位なイタリアを代表できる政権であった⁴⁹。

組閣過程において、ベルルスコーニはいかなる点を重視していたのであろうか。一部、政権全体の目標とも重複するが、以下の4点がベルルスコーニ個人の要点と言える。それは、①連立与党間に対立を作り出さないこと（もしくは対立がないような演出をすること）、②政権構築後のG8で成功を収めること、③大統領府の意向を尊重すること、④側近への利益配分である。

①について、この方針は各党との交渉の中で見られるため、ここでは簡単に触れるに止めるが、ベルルスコーニの対応のパターンは、次のようなものであった。連立与党との対立が起きた際に、まず組閣過程における自身の制度的な正統性を主張する。つまり憲法第92条は閣僚の指名権を首相に与えており⁵⁰、閣僚は自分（ベルルスコーニ）が決める、という基本姿勢である。しかしながら、表向きには制度的な正統性を主張しつつも、水面下では、各党との交渉を経て、着地点を測っている。

②については、ベルルスコーニ側近のウルバーニ談では、「G8を見据えて、外相ポストにはこだわり」があった。また、より広い観点から、国際政治は極めて政治的な舞台であり、外相ポストには政権を代弁できる人物を充てることも述べられている。加えて、米伊関係を重視した人選を行うことも考慮されていた。これらの要素を満たす人物として、ベルルスコーニが外相ポストに充てたのは、世界貿易機関（World Trade Organization, WTO）・前長官のルッジェーロ（Renato Ruggero）であった⁵¹。外相ポストにはCCD党首のカシーニ（Pierferdinando Casini）が就くこととなっていたが、それを変更して、連立与党からは批判も出た中で、外相ポストはルッジェーロで決着を見ることとなる。ここに、第二次政権の目標の1つが達成される。

また、第二次政権の組閣過程では、大統領府への対応が異なっていた（③）。第一次政権では大統領府から組閣名簿の一部を拒否される事態があったが、第二

次政権では、ベルルスコーニに大統領府の意向を事前に尊重し、大統領府との間に対立を作り出さないようにする努力が見られた。例えば、組閣早々に大統領府からG8を見据え組閣を早めるように要請され、ベルルスコーニはその意向を尊重している⁵²。それは、組閣過程中盤で、大統領府から組閣の期限を6月8日と伝えられた際も同様であった⁵³。他にも、大統領府からレーガの閣僚候補者について懸念が示された際も、レーガとの関係から対応の難しさがあったものの、結果として大統領府の意向は尊重されている⁵⁴。

最後に、④側近への利益配分であるが、特に組閣終盤でこの問題が組閣上の難問として扱われるようになる。組閣中盤でベルルスコーニは、組閣に奔走するピザヌ、ラ・ロツジャ、スカヨーラらを含むフォルツァの野党期にベルルスコーニを支えた側近たちにはポストを与えたいことを明らかにしている。しかしながら、それに当たってはポストの制約から、全員を満足させることは不可能であることも理解されていた⁵⁵。第二次政権の組閣過程では、ベルルスコーニに近い議員たちが組閣を調整する手法が組閣を通じて用いられている。実際に、首相秘書官にはベルルスコーニの右腕であるレッタが就き、経済財政相にはトレモンティが就任しているが、この2人は常にベルルスコーニの分身として連立与党との調整に当たっていた。先のピザヌについては、「弟分（fraternal amico）」とまで述べている⁵⁶。最終的に、彼ら側近への利益配分を達成するために、ベルルスコーニは、閣僚数、副大臣、政務官の数を増やすことで対応したのであった。

国民同盟の利益とベルルスコーニとの関係

フォルツァ以外の連立与党の利益とはどのようなものであり、ベルルスコーニとの間にはどのような関係が見出されたのであろうか。連立与党の中でも第一次政権にも参加し、連立内での動きを捉えやすい国民同盟とレーガを取り上げる。

国民同盟の利益は、政権内での国民同盟の主導的な立場にあった⁵⁷。組閣過程早々にフィーニが副首相ポストを確保した⁵⁸ことで、組閣過程における国民同盟

の立場は比較的安定して推移することとなる。組閣過程での国民同盟の要求からは、ベルルスコーニ及びフォルツァを牽制し、政権内でフォルツァと国民同盟の力関係を均衡させようとする意図が要所要所に垣間見える。それは、「政権内の『リベロ』でありたい」というフィーニの言葉に如実に表れている。その真意は、国民同盟が政権内で自由に動くことが可能で、自党が注目する争点に介入できる立場でいたいということにあった。

一方で、政権の決定は、集団的なものに拠るべきとの考えを示しており、ベルルスコーニを牽制している⁵⁹。加えて、ベルルスコーニがテクノクラートの入閣を企図しようとする度に、フィーニはテクノクラートに対して否定的な見解を述べ⁶⁰、フォルツァへの対抗勢力としての役割を組閣過程から担おうとしていた。そして、国民同盟のポスト数については、第一次政権時よりも増やすこと、またそれらのポストは「重要な」ポストであることを求めている⁶¹。ベルルスコーニ及びフォルツァのワンマンショーにはしたくないとの意図から、自党をいわば政権内でのブレーキ役として位置づけている。

組閣終盤になると、フォルツァと国民同盟の間で利益の交換が行われるようになる。その背景には、側近への利益配分に苦慮するベルルスコーニに対し、フィーニ及び国民同盟側が自党の持つポストをフォルツァに譲るという関係性があった。国民同盟は組閣序盤で国防相ポストを保持することに成功しており、国民同盟内でも国防相ポストは最低ラインとして捉えられていた⁶²。一方、フォルツァ内には国防相ポストは最大与党であるフォルツァが占めるべきとの声もあった⁶³。そのような中で、組閣後半にかけて、ベルルスコーニが側近へのポスト配分に苦労するようになる。そこで、国民同盟から出されたのが、国防相ポストをフォルツァに譲る代わりに、複数のポスト、例えば、インフラ相やコミュニケーション相などを国民同盟に与えるという案である⁶⁴。結果、ベルルスコーニ側はこの案を飲み、国防相にフォルツァが就く代わりに、国民同盟に複数のポスト配分がなされた⁶⁵。このよう

に、組閣過程における国民同盟は終始ベルルスコーニ及びフォルツァに対して優位な立場で行動することができていた。

レーガの利益とベルルスコーニとの関係

ベルルスコーニと国民同盟が政権の中で安定した取引が可能な関係にあった一方で、関係性が不安定で常に競合状態に晒されていたのが、ベルルスコーニとボッシ及びレーガの関係であった。その背景にあるレーガの利益は、①政権の監視役としての立場を確保すること、②政権における「可視性」の追求、③権限委譲の達成の3つであった⁶⁶。

レーガが組閣序盤で要求していたポストは下院議長であった⁶⁷。その意図は、レーガが下院議長ポストを得ることで、政権の動きをコントロールしたいということにある(①)。しかしながら、この要求は、フォルツァと国民同盟も議長ポストを望んだことから、衝突することになる。組閣過程におけるレーガの行動パターンは、自党の望むポストが得られなければ、閣外協力をちらつかせ自党の利益を達成する、というものである⁶⁸。ただし、レーガの揺さぶりはあくまで閣外「協力」、すなわち内閣には入らないことの示唆であって、倒閣をちらつかせてはいないことは第一次政権との違いである。下院議長ポストを巡っても、当初からベルルスコーニは留保を伏しており⁶⁹、ボッシは閣外協力を示唆していた。結局、下院議長はCCDのカシーニに決まり、レーガは希望の下院議長ポストを得られない結果に終わる⁷⁰。

その後、レーガが強く要求したのが、司法相ポストであった。候補はマローニ(Roberto Maroni)であったが、マローニ司法相案に対しては大統領府から懸念が伝えられ、ベルルスコーニは大統領府の意向を考慮せざるを得なくなる。しかしながら、ベルルスコーニも簡単にマローニ司法相案を却下することができなかった⁷¹。そこで、ボッシからベルルスコーニに突きつけられた課題とは、選挙結果を組閣に反映せよ、ということであった(②)。それはまた、レーガが政権内で埋没しないよう、有権者のメッセージを政権に反

映させることを意図したことも意味した⁷²。ベルルスコーニからすると、レーガの下院議長ポストを退けた上に、ここで司法相案を一掃してしまうと政権内に不和を生じさせることになり、容易に司法相案を退ける訳にもいかなかった。それゆえ、ベルルスコーニは大統領府とレーガの板挟み状態に陥ることとなる。

この「マローニ問題」は、以下のような形で決着を見ることとなる。結論から言えば、マローニの司法相案は実現しなかった。その反面、レーガの利益を満たす対応がなされた。それは、レーガが要求していた福祉相にマローニを当て、ボッシに権限委譲に関する無任所にポストを与える、というものであった⁷³。ここで、レーガは下院議長・司法相を立て続けに得られなかった一方で、レーガの念願の政策課題である③権限委譲に関して裁量を得ることになる。

3.2. 分析

以上のような連立与党間の利害関係から見られるものとは何であろうか。以降の分析では、まず、第二次政権の組閣結果の特徴を掴む。次に、ベルルスコーニとフォロワー（ベルルスコーニ側近と連立与党）の関係をまとめる。組閣過程における連立与党間での閣僚ポストのやり取りの結果、連立与党間の政策的領域の住み分けと競合が生じた。それらを見的过程中でベルルスコーニのリーダーシップの特徴を明らかにする。

第二次政権の組閣の特徴として、閣僚の数が増加したことが第一に挙げられよう。バッサニーニ改革で12に減った閣僚を14に増やしただけでなく、副大臣と政務次官も増加している。前任のアモート内閣で入閣した政治家の総数が79人であったのに対し、第二次政権では85人となった。また、無任所大臣でも新たなポストが創出されている。第二の特徴として、入閣人数はフォルツァに有利に割り振られた。閣僚の構成は首相を除く26のポストのうち、11がフォルツァに割り当てられ、次に多いのが国民同盟の5、レーガの3、CCD-CDUの2と続き、テクノクラートは5人が入閣した。また、53人の政務次官のうち、27をフォ

ルツァが占めた。政務次官の割り当ては、国民同盟に11、レーガに6、CCD-CDUに5となっている。また、第二次政権には6名の女性も含まれ、女性の入閣にも注意が払われることとなった⁷⁴。

そして、組閣過程から見るリーダー・フォロワー関係は以下のようにまとめられよう。まず、各党が自党の利益を追求しようとする組閣過程の中ではどの政党とも利害の対立が見られた。その中で比較的關係性が安定していたのは、国民同盟との関係であり、一方で組閣過程を通じて不安定であったのがレーガとの関係であった。国民同盟については総選挙終了後速やかに副首相のポストがフィーニに与えられ、フォルツァに次ぐ閣僚ポストが割り振られている。フォルツァと国民同盟の間にも利害の対立があったが、副首相ポストを得たことにより優位な立ち位置を確保した国民同盟がフォルツァとの利益の交換に出ることで、両党の均衡点が見出されていた。また、CCD-CDUとの関係性については、その情報量の圧倒的な少なさから、分析の射程に入れることが叶わないが、ポストの調整・交代に円滑に応じていることから、関係性は国民同盟同様安定的であると判断して良いだろう。

一方、レーガとの間では、組閣過程の初期（5月17日ごろ）から最終盤（6月5日ごろ）までほぼ一貫して何らかの対立を伴っていた。フォルツァとこれら2党との関係性の違いについては、地理的な支持基盤の違いにより説明が可能である。北部に支持が偏っているフォルツァと南部に支持基盤が強い国民同盟は支持層の重複が少ない。そのため、むしろこの2党が協調を見せることは合理的な選択である。一方、フォルツァとレーガは第2節でも述べたように、支持地域が重複しており、互いの支持層を奪い合っている関係にある。そのため、フォルツァとレーガの関係には不可避免的に対立が生じるのである⁷⁵。

次に、閣僚ポストの割り振りから、政策領域の住み分けと競合が生じることとなった。多大な権限を持ち、スーパー官庁とも呼ばれる経済財務相を第一次政権に引き続き、ベルルスコーニ最側近のトレモンティを当てることに成功したことは、経済政策におけるフォル

ツァの影響力を大きく高めた。経済政策で重視されているのが、財政赤字の解消である⁷⁶。ベルルスコーニの新自由主義的な志向は、フォルツァ初の党大会で、危機的な状況に見舞われた国家が参照すべき事例として、サッチャー (Margaret Thatcher) やレーガン (Ronald Reagan) を挙げ⁷⁷、隣国の事例としてスペインのアスナール (José María Aznar) による経済実績も挙げている⁷⁸ことなどからも明瞭である。一方で、所信表明演説からは新自由主義一辺倒ではないことが見られた。というのも、有権者にとって負担の重い税からの税収を軽減し、社会的弱者へ当てべき税収を増やす旨が表明されているし、労働市場の規制緩和を政策課題としつつも、公共投資やインフラ事業の重要性も説かれているのである⁷⁹。

また、ベルルスコーニ推薦のルッジェーロを外相に当てることに成功した上、国防省ポストもフォルツァが抑えたことで、外交分野においてもフォルツァは自律性を得た。そこでは、ベルルスコーニは所信表明演説で EU と NATO、中でも特にアメリカの重要性に触れている。アメリカに対しては「我々はアメリカ合衆国の友人、しかも特別な形での友人である (siamo -e lo siamo in modo speciale- amici degli Stati Uniti d'America)」とまで述べている⁸⁰。対米関係については、ベルルスコーニは 2001 年の 9・11 テロに際して、西ヨーロッパの中では逸早くアメリカへの連帯を示し、2003 年 2 月にはイラク有志連合への参加宣言を行っている。参加宣言はのちに撤回されたものの、ベルルスコーニはブッシュ政権側に立ち、反戦派や独仏を批判するとともに、米国によるイタリア国内の基地使用を容認するに至る⁸¹。

国民同盟は、副首相ポストを抑えたことに加え、副首相のフィーニには治安政策の権限が付与されたため、治安の面で自党の利益を達成している。組閣過程でもフィーニは G8 と絡めて治安対策への関心を示していたところである⁸²。演説の中では、治安の問題はマフィア対策と移民対策の 2 つのテーマが掲げられることとなった⁸³。このうち移民対策については、移民の滞在許可規則の厳格化を図るために、滞在許可と労

働許可の結合、不法滞在者収容施設の設置、EU 域外外国人の滞在許可書交付時の指紋押捺などを規定した 2002 年法律 189 号⁸⁴(通称ボッシ・フィーニ法) として第二次政権下で結実することとなる。

レーガについては、ボッシが権限委譲担当相に就任し、そこにレーガの利益があった。例えば、組閣初期の 5 月 16 日から権限委譲についての念押しがあった⁸⁵、選挙戦の段階から、権限委譲をめぐる駆け引きがあった。ベルルスコーニがレーガに権限委譲で譲歩する代わりに、自党の利益を達成するという関係が見られる。ただし、中央・地方関係については政権内でも対立があり、ベルルスコーニはフォルツァの党大会でも連邦主義的改革について言及している上に⁸⁶、無任所の地方担当相をフォルツァが取ったため、一定の制約が課されていると見た方が適切である。ベルルスコーニは連邦主義改革について、演説の始めで言及している。連邦主義改革は、演説の中では行政の効率化の文脈で語られ、北部と南部の均衡および国としての一体性の範囲内で進められることが目指される。また、分権に関連して、補完性の原理にも言及がなされ、社会保障改革も連邦主義改革の中に位置付けられている⁸⁷。連邦主義改革については、2005 年に国民投票が実施され、その内容は、州への教育、保健衛生、警察などの権限強化や上院の地方代表化などであったが、否決されている⁸⁸。

このような、組閣過程における利害のやり取りや、対立が生じた際のベルルスコーニの対応から、リーダーシップの取引的特徴が確認される。さらに、ベルルスコーニの側近の処遇への対応からもベルルスコーニのリーダーシップのスタイルを見出すことが可能である。組閣過程全体を通じて、大きな問題となっていたのは、前述のレーガとの関係に加え、ベルルスコーニ側近の処遇であった。特に 6 月に入ってから、その点が前面に出てきており、最終盤まで尾を引く形となっている。結果を見ると、ベルルスコーニ側近、中でも野党期に党改革に尽力した人物のほとんどが内閣のメンバーに名を連ねている。具体的には、第一次政権からフォルツァに関わっていたレッタ (首相秘書官)

とトレモンティ（経済財政相）はもちろんのこと、最後まで案件として残ったスカヨラとピザヌについては、スカヨラが内務相、ピザヌが政府プログラム執行相に就いている。

閣僚ポストが当てられなかった人物についても、以下のように、何らかのポストを与えることに成功している。組閣当初から立法簡素化相に割り当てられていたコスタ（Enrico Costa）には保健副大臣、ラ・ロジャには地方担当相（無任所）、組閣過程ではほとんど論争に上がらなかったウルバーニとミッチケー（Gianfranco Micciché）にもポストが与えられた。この点から、組閣過程におけるベルルスコーニのリーダーシップの第二の特徴が見出される。それはクライエンテリズム的なリーダーシップである。自身とその側近の利害を達成するために、バッサニーニ改革という制約を取り払う、換言すれば、制度的な枠組みを変更するという手法は、後の政権運営にも見られるように、いかにもベルルスコーニらしいやり方であろう。

4. 結びに

さて、第二次政権の組閣過程で発揮されたベルルスコーニのリーダーシップの特徴とは何であったのだろうか。それは、次の2点に集約される。第一に、政権を構成するアクター間での利益の分配におけるリーダーシップの取引的側面であり、第二に、ベルルスコーニとその側近との間に見いだされるクライエンテリズム的な側面である。

リーダーシップのクライエンテリズム的側面について、バーンズの議論を見てみると、バーンズはそのような要素を考慮していなかったわけではない。バーンズは、取引的リーダーシップの議論の中で、「リーダーとフォロワーのパトロニックな関係（*patrón relationship between leaders and followers*）」に言及してはいる。しかしながら、そのようなリーダーシップは、確立された政党システムやリーダーへのアクセスのチャネルを

欠く途上国で有効な手段たり得る⁸⁹として、リーダーシップの議論の遡上に乗せていない。ここで、現代のヨーロッパで出現するポピュリズムに関する捉え方が示唆的である。従来、ポピュリズムは未発達な政治社会に見られる現象だと思われていた。しかし、近年、成熟したはずのヨーロッパ各国でポピュリズム現象が生じているのである⁹⁰。このような背景を考えると、リーダーシップにおけるクライエンテリズム的な側面をリーダーシップの議論の射程に入れることも必要な作業となろう。

本稿が扱った政治の人格化、大統領制化などの議論において、注目されるアクターに加えて、その周辺のアクターに視点を広げることで、そのような現象が本当に生じているのか否か、そして生じているとすれば、その構造はいかなるものであるのかを明らかにできるということが本稿の含意である。選挙に限っては、注目されるアクターへの視点だけである程度の現象を捉えることも可能かもしれない。しかし、それは選挙を離れ、政治の決定過程や決定構造の次元に入ると、そのアクターだけでは説明できない事象が出てくる。もしくは、特定の人物に注目しすぎることで見方を誤るかもしれない。その場合、対象の外的要因に着目し、相対化することが有効である。

また、ベルルスコーニ研究に限って言うと、以後の分析のポイントとして重要なのは、組閣過程で見出されたリーダー・フォロワー間関係の変化である。その変化が、第二次政権の政策決定を含めた政権運営の変化を説明する。具体的には、任期を経る中で、連立与党間関係にどのような変化が生じ、それはベルルスコーニの裁量にいかなる影響を与えたのかという点である。そして、より重要なのは、フォルツァ内、すなわちベルルスコーニ側近との関係の変化である。フォロワーが権力資源を増し、ベルルスコーニに対抗力を持つようなサブ・リーダー化するポイントがあるとなれば、それはベルルスコーニのリーダーシップにとってより強大な脅威となるであろう。

注

- 1 Burns, James MacGregor (1978) *Leadership*, New York, HarperCollins Publishers, p. 18.
- 2 *Ibid.*, pp. 19-20.
- 3 吉田徹 (2008) 「『選択操作的リーダーシップ』の系譜－ミッテランとサッチャー」日本比較政治学会編『リーダーシップの比較政治学』p. 61、早稲田大学出版部。
- 4 Blondel, Jean (1987) *Political Leadership*, London, Sage, pp. 11-12
- 5 伊藤光利 (2008) 「序論：コア・エグゼクティヴ論の展開 政治的リーダーシップ論を超えて」伊藤編『政治的エグゼクティヴの比較研究』p. 2、早稲田大学出版部。
- 6 伊藤 (2008)、pp. 3-4。
- 7 Poguntke, Thomas and Paul Webb (2005) 'The Presidentialization of Politics in Democratic Societies: A Framework for Analysis', Poguntke and Webb (eds.) *The Presidentialization of Politics. A Comparative Study of Modern Democracies*, Oxford, Oxford University Press, p. 1.
- 8 *op. cit.*, pp. 13-17.
- 9 待鳥聡史 (2006) 「大統領的首相論の可能性と限界－比較執政制度論からのアプローチ」『法学論叢』158 (5・6)、pp. 317-18。
- 10 待鳥 (2006)、pp. 323-24。
- 11 阪野智一 (2008) 「イギリスにおける中核的執政の変容 脱集権化のなかの集権化」伊藤編『政治的エグゼクティヴの比較研究』p. 50、早稲田大学出版部。
- 12 Campus, Donatella (2010) 'Mediatization and Personalization of Politics in Italy and France: The Cases of Berlusconi and Sarkozy', *International Journal of Press/ Politics*, 15 (2), p. 220.
- 13 吉田徹 (2011) 『ポピュリズムを考える 民主主義への再入門』、p. 43、NHK 出版。
- 14 カリーゼ、マウロ [村上信一郎訳] (2012) 『政党支配の終焉 カリスマなき指導者の時代』法政大学出版局。
- 15 Poguntke, Thomas and Paul Webb (2005) 'The Presidentialization of Politics in Democratic Societies: A Framework for Analysis', p. 1.
- 16 Calise, Mauro (2005) 'Presidentialization, Italian Style', Poguntke and Webb (eds.) *The Presidentialization of Politics. A Comparative Study of Modern Democracies*, Oxford, Oxford University Press, p. 97.
- 17 *op. cit.*, p. 99.
- 18 Elgie, Robert (1995) *Political Leadership in Liberal Democracies*, Basingstoke, Palgrave Macmillan, p. 163.
- 19 *Ibid.*, pp. 168-69.
- 20 伊藤武 (2014) 「イタリアにおける保守主義政党－『例外』としてのフォルツァ・イタリア」水島治郎編『保守の比較政治学』p. 223、岩波書店。
- 21 村上信一郎 (2006) 「ベルルスコーニ現象の解釈学」『神戸大論叢』57 (1)、p. 377。
- 22 Blondel, Jean and Jean-Louis Thiébault (2010) 'Italy. From Partitocracy to Personal Parties', Jean Blondel and Jean-Louis Thiébault with Katarzyna Czernicka, Takashi Inoguchi, Ukrist Pathmanand and Fulvio Venturino (eds.) *Political Leadership, Parties and Citizens. The Personalisation of Leadership*, New York, Routledge, p. 186.
- 23 伊藤武 (2016) 『イタリア現代史 第二次世界大戦からベルルスコーニ後まで』pp. 216-17、中公新書。
- 24 リーダー・フォロワー構造の2つの捉え方は分析レベルによって使い分けるべきものとして考えられる。それは、第二次政権の成り行きの変化を見る上では、レベルの異なる2つの次元でのリーダー・フォロワー間の構造の変化の両方に意味があると考えからである。組閣過程でのベルルスコーニのリーダーシップを捉えるためには、ベルルスコーニ側近への利益配分が鍵となる。しかし同時に、政権の行く末は政権を構成する連立与党にも左右されることになる。第二次政権の成り行きを分析する上では、ベルルスコーニを中心とするコア・エグゼクティヴに対し、連立与党を中心とする他のアクターがどのような自律性を持ち、ベルルスコーニに対抗していったのかという点を明らかにすることもまた重要であると考えられる。
- 25 具体的には、デル・デッビオ (Paolo Del Debbio)、デッラ・ヴァッレ (Raffaele Della Valle)、デッルトリ (Matcello Dell'Utri)、レッタ (Gianni Letta)、ラ・ロジジャ (Enrico La Loggia)、マルティーノ (Antonio Martion)、メンニッティ (Domenico Mennitti)、プレーヴィティ (Cesare Previti)、ウルバーニ (Giuliano Urbani) タヤーニ (Antonio Tajani)、トレモンティ (Giulio Tremonti)、ヴァルドゥッチ (Mario Valducci) らである。

- 26 具体的には、ボナイウティ (Paolo Bonaiuti)、ブルネッタ (Renato Brunetta)、クリミ (Rocco Crimi)、デッレルチェ (Giovanni Dell'Elce)、フラッティーニ (Franco Frattini)、ガスタルディ (Luigi Gastaldi)、マヨロー (Tiziana Majolo)、マルツァーノ (Antonio Marzano)、マシユー (Vittorio Mathieu)、スカヨーラ (Claudio Scajola)、ペーラ (Marcello Pera)、プレスティジャコモ (Stefania Prestigiacomo) らである。
- 27 2001 年総選挙における両陣営の連合形成の模索とその過程については、Donovan, Mark (2002) 'The Processes of Alliance Formation', James Newell (ed.) *The Italian General Election of 2001. Berlusconi's Victory*, Manchester, Manchester University Press, pp. 105-23 を参照。
- 28 MSI は 1994 年 1 月、より穏健な右翼として、国民同盟に党名を変更する。伊藤武 (2016)、p. 184。
- 29 伊藤武 (2014) 「イタリア」 網谷龍介・伊藤武・成廣孝編『ヨーロッパのデモクラシー 改定第2版』 pp. 237-39、ナカニシヤ出版。
- 30 中道右派陣営には、北部と支持基盤とするレーガと南部を支持基盤とする国民同盟が同居しており、連合形成は不可能に近かった。しかし、ベルルスコーニが仲立ちとなる形で、国民同盟との間で「善政の極」、レーガとの間で「自由の極」という 2 つの選挙同盟を作ることにより、連合形成が可能となった。ベルルスコーニの政界進出と 1994 年総選挙へ向けての過程については、村上信一郎 (2018) 「政治の覇者へ (第3章)」 村上『ベルルスコーニの時代－崩れゆくイタリア政治』 pp. 103-41、岩波新書を参照。
- 31 1991 年 1 月末から 2 月初頭の共産党・党大会で、PDS の結成が承認された。これを以て、共産党は結党 70 年余りの歴史に幕を降ろし、その後は PDS が共産党の後継政党となった。伊藤 (2016)、p. 161。
- 32 伊藤 (2014) 「イタリア」、pp. 246-49。
- 33 村上信一郎 (2018) 『ベルルスコーニの時代－崩れゆくイタリア政治』 pp. 145-50、岩波新書。
- 34 村上 (2018)、pp. 151-54。
- 35 村上 (2018)、pp. 160-61。
- 36 伊藤 (2016)、p. 191。
- 37 Poli, Emanuela (2001) *Forza Italia. Strutture, leadership e radicamento territoriale*, Bologna, il Mulino, p. 117。
- 38 Paolucci, Caterina (2002) 'Campaign Strategies and Tactics: Leaders, Experts and the Media', James Newell (ed.) *The Italian General Election of 2001. Berlusconi's Victory*, Manchester, Manchester University Press, p. 140。
- 39 コラリーツィ、シモーナ [村上信一郎監訳、橋本勝雄訳] (2010) 『イタリア 20 世紀史 熱狂と恐怖と希望の 100 年』 p. 428、名古屋大学出版会。
- 40 組閣過程の時系列の流れは付録 1 を参照のこと。
- 41 以後、便宜的に政党連合「白い花」は CCD-CDU と表記する。
- 42 伊藤 (2014) 「イタリア」、p. 251。
- 43 *Il Corriere della sera*, 'L'Italia dopo il voto, Il nuovo Camera', p. 15, 16 Maggio 2001。
- 44 *Il Corriere della sera*, 'L'Italia dopo il voto, Il nuovo Senato', p. 14, 16 Maggio 2001。
- 45 *Il Corriere della sera*, 'L'Italia dopo il voto, Il nuovo Camera', p.15, 16 Maggio 2001; *Il Corriere della sera*, 'L'Italia dopo il voto, Il nuovo Senato', p. 14, 16 Maggio 2001 より筆者作成。
- 46 *Il Corriere della Sera*, 'Governo, una maggioranza a prova di imboscate', p. 2, 15 Maggio 2001。
- 47 *Il Corriere della Sera*, 'Voglio una Camera, meglio Montecitorio', p. 2, 16 Maggio 2001。
- 48 *Il Corriere della Sera*, 'Voglio una Camera, meglio Montecitorio', p. 2, 16 Maggio 2001。
- 49 *Il Corriere della Sera*, 'Deciderò nel rispetto della Costituzione', p. 9, 20 Maggio 2001。
- 50 田近肇 (2014) 「イタリア共和国憲法 [1948 年]」 初宿正典・辻村みよ子編『新解説 世界憲法集 第3版』 p. 146、三省堂。
- 51 *Il Corriere della Sera*, 'L'ex direttore del Wto disponibile se la linea è bipartisan', p. 2, 17 Maggio 2001。
- 52 *Il Corriere della Sera*, 'Berlusconi-Ciampi, governo rapido per il G8', p. 3, 17 Maggio 2001。
- 53 *Il Corriere della Sera*, 'La formazione del governo sarà rapida', p. 4, 1 Giugno 2001。
- 54 例えば、*Il Corriere della Sera*, 'Ruggiero il migliore ministro degli Esteri', p. 10, 25 Maggio 2001。大統領府は、レーガのマローニの下院議長就任案、内務相就任案が出た際に、マローニの過激な政治的立場故に、懸念を示唆していた。
- 55 *Il Corriere della Sera*, 'Disponibili al dialogo con l'opposizione', p. 6, 31 Maggio 2001; *Il Corriere della Sera*, 'Caso Maroni, Lega pronta a non entrare nel governo', p. 9, 3 Giugno 2001。

- 56 *Il Corriere della Sera*, 'Ruggiero il migliore ministro degli Esteri', p. 6, 27 Maggio 2001.
- 57 *Il Corriere della Sera*, 'Farnesina, rispunta l'ipotesi Ruggiero', p. 2, 17 Maggio 2001.
- 58 *Il Corriere della Sera*, 'Orgogliosi dell'Europa, non deluderemo nessuno', p. 2, 15 Maggio 2001.
- 59 *Il Corriere della Sera*, 'Finì: i vertici di polizia e carabinieri risponderanno per il G8', p. 5, 18 Maggio 2001.
- 60 *Il Corriere della Sera*, 'Governo, Ruggiero e Kissinger da Berlusconi', p. 6, 24 Maggio 2001.
- 61 *Il Corriere della Sera*, 'Finì irritato con l'alleato: ci spetta più spazio', p. 6, 31 Maggio 2001.
- 62 *Il Corriere della Sera*, 'Disponibili al dialogo con l'opposizione', p. 6, 31 Maggio 2001.
- 63 *Il Corriere della Sera*, 'Caso Maroni, Lega pronta a non entrare nel governo', p. 9, 3 Giugno 2001.
- 64 例え、*Il Corriere della Sera*, 'La formazione del governo sarà rapida', p. 4, 1 Giugno 2001; *Il Corriere della Sera*, 'Giustizia, un caso Maroni per il governo', p. 9, 2 Giugno 2001.
- 65 *Il Corriere della Sera*, 'Governo, i ministri aumentano da 12 a 14', p. 11, 8 Giugno 2001.
- 66 *Il Corriere della Sera*, 'Voglio una Camera, meglio Montecitorio', p. 2, 16 Maggio 2001.
- 67 例え、*Il Corriere della Sera*, 'L'ex direttore del Wto disponibile se la linea è bipartisan', p. 2, 17 Maggio 2001; *Il Corriere della Sera*, 'Il leader del Carroccio. Io e la Lega nell'esecutivo solo con un altro ministero importante o una presidenza', p. 5, 19 Maggio 2001.
- 68 例え、*Il Corriere della Sera*, 'L'ex direttore del Wto disponibile se la linea è bipartisan', p. 2, 17 Maggio 2001; *Il Corriere della Sera*, 'Caso Maroni, Lega pronta a non entrare nel governo', p. 9, 3 Giugno 2001.
- 69 *Il Corriere della Sera*, 'L'ex direttore del Wto disponibile se la linea è bipartisan', p. 2, 17 Maggio 2001.
- 70 *Il Corriere della Sera*, 'Disponibili al dialogo con l'opposizione', p. 6, 31 Maggio 2001.
- 71 *Il Corriere della Sera*, 'Giustizia, un caso Maroni per il governo', p. 9, 2 Giugno 2001.
- 72 *Il Corriere della Sera*, 'Voglio una Camera, meglio Montecitorio', p. 2, 16 Maggio 2001.
- 73 *Il Corriere della Sera*, 'L'ufficio lo voglio qui, vicino a Berlusconi', p. 6, 12 Giugno 2001.
- 74 *Il Corriere della Sera*, 'Governo, debuttano sette viceministri', p. 5, 12 Giugno 2001.
- 75 村上 (2018), pp. 148-49.
- 76 Berlusconi, Silvio (2013) 'Dichiarazione programmatica del secondo governo Berlusconi. Senato della Repubblica, 18 giugno 2001', *I più importanti interventi di Silvio Berlusconi. Discorsi per la libertà*, Milano, Mondadori, p. 106.
- 77 Berlusconi, Silvio (2013) 'Discorso dei apertura al primo congresso nazionale di Forza Italia. Milano, 16 aprile 1998' *I più importanti interventi di Silvio Berlusconi*, Milano, Mondadori, pp. 30-31.
- 78 *op. cit.*, pp. 37-38.
- 79 Berlusconi, Silvio (2013) 'Dichiarazione programmatica del secondo governo Berlusconi. Senato della Repubblica, 18 giugno 2001', pp. 106-8.
- 80 *op. cit.*, p. 98.
- 81 第二次政権のイラク戦争への対応については、八十田博人 (2004) 「ベルルスコーニ政権の対応外交」 櫻田大造・伊藤剛編著『比較外交政策 イラク戦争への対応外交』 pp. 193-229、明石書店を参照。
- 82 *Il Corriere della Sera*, 'Finì: i vertici di polizia e carabinieri risponderanno per il G8', p. 6, 31 Maggio 2001.
- 83 Berlusconi, Silvio (2013) 'Dichiarazione programmatica del secondo governo Berlusconi. Senato della Repubblica, 18 giugno 2001', pp. 109-10.
- 84 *Gazzetta Ufficiale*, 'Legge 30 luglio 2002, n. 189', n. 199.
- 85 *Il Corriere della Sera*, 'Voglio una Camera, meglio Montecitorio', p. 2, 16 Maggio 2001.
- 86 Berlusconi, Silvio (2013) 'Discorso dei apertura al primo congresso nazionale di Forza Italia. Milano, 16 aprile 1998', pp. 52-53.
- 87 Berlusconi, Silvio (2013) 'Dichiarazione programmatica del secondo governo Berlusconi. Senato della Repubblica, 18 giugno 2001', pp. 101-3.
- 88 Vandelli, Luciano (2015) *Il sistema delle autonomie locali. Sesta edizione*, Bologna, il Mulino, pp. 54-6.
- 89 Burns (1978), p. 267.
- 90 高橋進 (2013) 「まえがき」 高橋進・石田徹編『ポピュリズム時代のデモクラシー ヨーロッパからの考察』 p. ii、法律文化社。

付録1

第二次ベルルスコーニ政権組閣過程

		主な報道内容
5月	13日	総選挙で中道右派勝利
	15日	組閣に着手
	16日	ベルルスコーニ・ボッシ会談。ボッシ、内務・下院議長を要求、また、権限委譲について念押し
	17日	外相に元WTO理事長ルッジェーロ浮上。連立各党、特にレーガから反発
		ベルルスコーニ・チャンピ大統領会談、6月13日を目処に組閣要請
	18日	下院議長をめぐる各党の対立。下院議長については、レーガとフォルツァの対立。上院議長については、国民同盟とフォルツァの対立。また、ベルルスコーニは、ボッシを入閣させたい意向
	19日	ボッシ、閣外協力を示唆
	20日	ベルルスコーニから連立各党へ牽制。憲法に照らし、閣僚の指名権は首相にある旨を表明
		フィーニの希望ポストとして、国民同盟に重要閣僚を3つ、またテクノクラートの少ない内閣を望む
	23日	ベルルスコーニ、再度、外相にルッジェーロ指名。各党反発
	24日	ベルルスコーニから各党へ牽制。対立は20日と同じ構図。一方、一次政権と比較し、レーガの脅迫力低下も
	25日	依然ルッジェーロ問題は解決せず、また、上院議長ポストの駆け引きも
		中道右派各党党首集合、しかし会談はベルルスコーニ・フィーニのみ
	27日	アルコレ邸にてベルルスコーニ・ボッシ会談、レーガの下院議長ポスト近づくか？
6月	29日	ベルルスコーニ、大統領府へ
	31日	ベルルスコーニ側近の処遇に難ありの一方、確定ポスト・未確定ポストが鮮明に
		フィーニ、組閣を見越した発言
	1日	組閣の期限、6月8日か？ベルルスコーニ、組閣を急ぐ
	2日	司法相ポストでマローニ問題浮上
	3日	マローニ問題に関して、レーガは閣外協力を示唆
	5日	マローニ問題について、ボッシによる批判。再選挙の示唆も、トレモンティらの仲介
	6日	司法相・国防相をめぐる会談。組閣最終調整に
	7日	ベルルスコーニ側近の処遇問題浮上
		8日及び9日にチャンピと最終調整か？
	8日	閣僚ポストは14に
	9日	ベルルスコーニ側近のポスト確定
	10日	調整終了
	12日	チャンピ・ベルルスコーニ会談
		第二次ベルルスコーニ政権発足
	21日	上院信任投票
	22日	下院信任投票

付録 2

第二次ベルルスコーニ政権の閣僚リスト (括弧内は所属政党、tec. はテクノクラート)

首相	ベルルスコーニ (フォルツァ)
首相秘書官	レッタ (フォルツァ)
	ボナイウティ (フォルツァ、広報担当)
副首相	フィーニ (国民同盟)
内務相	スカヨーラ (フォルツァ)
国防相	マルティーノ (フォルツァ)
司法相	カステッリ (レーガ)
経済財政相	トレモンティ (フォルツァ)
文化財・文化活動相	ウルバーニ (フォルツァ)
インフラ・運輸相	ルナルディ (tec.)
農業政策相	アレマンノ (国民同盟)
環境・国土保全相	マッテオーリ (国民同盟)
福祉相	マローニ (レーガ)
外務相	ルッジエーロ (tec.)
産業活動相	マルツァーノ (フォルツァ)
初等教育・大学・研究相	モラッティ (tec.)
無任所	
公共機能・治安調整担当相	フラッティーニ (フォルツァ)
議会関係相	ジョヴァナルディ (CCD)
地方担当相	ラ・ロッジャ (フォルツァ)
機会平等相	プレスティジャコモ (フォルツァ)
権限委譲担当相	ボッシ (レーガ)
テクノロジー革新相	スタンカ (tec.)
コミュニケーション相	ガスパッリ (国民同盟)
健康相	シルキア (tec.)
政治共同体担当相	ブッティリオーネ (CDU)
政府プログラム執行担当相	ピザヌ (フォルツァ)
在外イタリア人担当相	トレマツリア (国民同盟)
上院議長	ペーラ (フォルツァ)
下院議長	カシーニ (CCD)